

ロマン主義に於けるプロメテウスの王国

熊 谷 園 子

序

シェリーの『縛めを解かれたプロメテウス』¹⁾は、古代ギリシャの悲劇作家アイスキュロスの同名の作品に由来して書かれたものである。アイスキュロスはこの作品を、ギリシャ悲劇の常套に従って三部作形式で書いたと思われるが、現存するのは『縛められたプロメテウス』だけである。その続編に当る『縛めを解かれたプロメテウス』は、もとの台本は失われてしまっていたが、かなりの部分がラテン語に訳されていたり、他の古代作家の作品の中に引用されているため、その主な内容は周知されている²⁾。しかしながらシェリーは、アイスキュロスの失われた劇を修復しようとしたのではない。彼はアイスキュロスの描いたプロメテウスに心酔し、そのプロメテウスを使って独自の神話を物している。神話は人々を取り巻く宇宙、世界、社会を説明する役割を果たしてきたが、ロマン主義の時代を背景にした神話も新しい宇宙観、人間観を表現するものでなければならないだろう。そのために新しい筋も必要であった。

プロメテウスは常に人間との関わりのなかで語られる神である。ギリシャ神話の中では人間は、「安楽に生を送る」神々と対比して、惨めで取り柄のないものと描かれている。そのような人間族に関わりつづける神プロメテウスは神々の中で奇妙で特異な存在であり、勢い反主流の立場になる。彼は人間に正当以上のもてなしを与えたという廉で主神ジュピターに罰せられたのであるが、その彼を、苛酷な試練にもめげず不正を訴えつづけて神々の安逸の座を揺さ振る正義の戦士としたのはアイスキュロスの独創であった。彼は人類に同情する神であると同時に、自ら人間の宿命を担い、人間を救済するものとして描かれている。シェリーはアイスキュロスが描いた人類の救済者プロメテウスを引き継ぎ、彼の『縛めを解かれたプロメテウス』を書いている。

神話の背景とテーマ

アイスキュロスの神話は、次のとおりである。

巨人神プロメテウスは、神々のなかで唯ひとり主神ジュピターに逆らい、主神による人間族滅亡の計画に反対した。その上彼は、惨めな暮らしをしていた人間に天上から火を盗んで与えたためジュピターの逆鱗に触れ、スキュティアの荒野、世界の北端にそびえる岩山に青銅のくさびで縛りつけられた。そして磔になったプロメテウスのもとに日毎ジュピターのはげ鷲が来て彼の肝臓を食い尽くしていくが、夜の間にまた新しい肝臓が生じるため、彼は来る日も来る日も同じように苦しめられた。しかし彼は苦しみへ屈伏するどころかジュピターの自分に対する不正と忘恩を叫び主神を罵倒し続けた。というのはかつて天上で古い神々と新しい神々が争ったとき、プロメテウスはジュピターの味方につき、彼の計略で古い神々を地の底に隠し込んだため、ジュピター率いる新しいオリンポスの神々は勝利を得ることが出来たのであった。また、プロメテウスは彼の母である「大地」から、ジュピターにまつわる重大な秘密を聞かされていた。それはジュピターが海神の娘セティスと結婚すると彼よりも強大な息子が生まれ、彼の主権が奪われるというものであった。ジュピターはその秘密を聞き出そうと、ヘルメスを遣ってプロメテウスを威嚇したが、彼は反対にヘルメスを罵り追い返した。立ち去るまえにヘルメスは、神々のうち誰かがプロメテウスの代りに彼の苦難を背負って黄泉に行ってくれるまでは彼の縛めは解かれることはないと言を残した。プロメテウスは不死の神であるから死んで苦しみを終らせることはできない。また彼は運命を見通す予知能力をもっていたので、自分が解放されるのは気の遠くなるほど遠い将来であることを知っていたが、ジュピターの頑なな心の前に中途半端な妥協は許せなかった。永い年月の後、この世界の涯を偶然に通りがかった英雄ヘラクレスはプロメテウスを苦しめているはげ鷲を見つけて弓矢で射落とした。またヘラクレスにはプロメテウスの代わりに黄泉に進んで赴く神に心当たりがあった。それは、半獣神ケイロンが間違っってヘラクレスの毒矢に当り不治の苦しみを蒙ってしまったので、不死の身をかえって恨み、一日も早く黄泉へ行って休みたいと言っていたからである。ジュピターはこのケイロンの申し出をプロメテウスの身代りとして受け入れたので、プロメテウスはジュピターにかの重大な秘密を明かした。そこでジュピターは、セティスとの結婚を止め、彼女を人間の英雄ペレスと結婚させて自分の王座を揺るがないものにすると共に、プロメテウスの縛めを解き、その記念として彼に柳の枝で作られた冠と鉄の指輪を帯びさせた。ここに二人の和解が成立した。

以上が粗筋であるが、かくも猛々しく正義を訴えて抵抗し続けてきたプロメテウスがあまり

に容易にジュピターと和解してしまうのは府に落ちないと感じる向きもあるだろう。その辺りは台本が失われてしまっている以上、実際にジュピターとプロメテウスの間にどのようなやりとりがあったのか細かいところはわからないが、学者の中には、ジュピターはプロメテウスとの和解の条件として、人間にも正義を与えるようにしたのでないかと考える人もいる³⁾。いずれにせよ「和解」そのものはこの神話の命であるといっても過言ではないのである。また和解に先だって、プロメテウスは縛めの記念として柳の冠と鉄の指輪を帯びた点も大切な部分である。これは彼の縛めには二重の意味があったことを示している。一つは主神に逆らった罪としての、もう一つは人間の分際を知らしめるものとしてののである。まず柳の冠について考えてみよう。彼は神々の争いのときジュピターに加勢したのであるが、それは古い神々である巨人神たちが暴力で治めようとするのに対して、ジュピターは力はあるでも暴力を使わず、計略で敵を制するというプロメテウスの考えを受け入れたからであった。ドラマの中で、「仲直りと友愛とを前から望んでいる私に、いつかは彼の方からも望んで進めてこよう。」⁴⁾というセリフがあるように、どんなに罵倒し、反抗してもプロメテウスがジュピターに求めたものは思慮深さと正義であった。アイスキュロスの神話の背景をなす歴史的出来事には、ペルシャ戦争に於けるギリシャの勝利が挙げられる。ギリシャの諸ポリスはこれよりペルシャの再度の来襲に備えて同盟を結び、次第にアテネを中心にした汎ギリシャ的な統一へと向かった。それによって、これまで氏族内での家長的裁決で済まされていたものが、もっと広範囲な正義を必要としはじめた。国家の形成に伴って未熟な正義も苦しみ、あえぎながら成長していかななくてはならなかった。ジュピターとプロメテウスの激しい確執と友愛のなかにアイスキュロスが描いたものは母国の正義の樹立という困難で壮大なテーマであった⁵⁾。そして柳の冠は、確立した正義、世界の秩序の前にはプロメテウスも柳の枝のように柔軟に身を曲げて屈するという立場の了解である⁶⁾。

一方、鉄の指輪はどうであろうか。プロメテウスは人間を大切にすぎた罰として縛めを受けた。刑罰にも色々あるわけだが、彼には縛めが施された。縛めの状態とはそれ自身人間の姿である。そこで縛めが人間を愛したプロメテウスに相応しい刑とされたと思われる。人間は様々な制約の中で生を営む。神々の自在に比して見れば、人間の存在様式は地上を這い回る不自由なものにすぎない。その上、死も運命づけられている。しかも、人間は動物とは違ってそれに甘んずることのできない生き物である。そこに煩悩があり、人間特有の悲劇がある。古代ギリシャにはそういう人間の現状に対してもともと強い厭世思想がある。女神ヘーラーは、ある人間の母親の祈り一息子たちの親孝行の報酬に最高の賜物を与えてあげて下さい—に対して、彼らに苦しむことのない即刻の死を報酬に与えたという⁷⁾。「人間として最大の幸福は生れ出

ないこと、次善は能うるかぎり速やかに死を迎えること。」という言葉は古代の哲学者の間に漂っていた厭世気分をよく表わしているものである。そのように上から見下ろして、どうせ死んでしまう命など無意味の骨頂だと考えるのがジュピターの立場である。それに対して、プロメテウスは人間の悲劇的実存を承知しながら、あえて人間存在を肯定する立場をとる。そのひたむきな人間愛の前にはジュピターも手加減せざるをえなかったのである。その記念の鉄の指輪は、双方で「人間の分際」を了解し合ったことを意味している。そしてプロメテウスが鉄の指輪をはめたことで、彼は悲劇的宿命を負った人間一般を代表していることを明かしている。

プロメテウスは、自分に対する恩を忘れて縛りつけたから、ジュピターを不正だと訴えた。つまり、それはプロメテウスがジュピターに正義を求めたことを意味するわけだが、そのプロメテウスが人間を代表しているということになると、人間がジュピターに正義を求めたことになる。そして、プロメテウスが解放されたということは、プロメテウスが正義で迎えられたことになり、それはまた人間が、その「分際」を忘れない限りにおいてであるが、正義で迎えられたことになる。即ち、人間はその生存権を認められたことになり、それは、まさしく人間族の救済である。自ら人間となって人間を救済するというこの特質がアイスキュロスの独創の最大のポイントで、シェリーが自分の神話を書き始めるほど惚れ込んだ部分である。

シェリーの時代はまた別な問題を抱えていた。ヨーロッパのあちこちで旧制度の動揺が始まり、国家の統制が揺らぎ始めた時期であった。人々は自分たちの手で自由と正義を確立しようと動きだし、市民革命なども勃発した。自由と正義はすぐにも掴めるものと思われたが、結果は何処でもひどい幻滅に終り、人々は大きな自信喪失を味わった。この光景は、フランス革命の結末を思い浮べればわかりやすい。これらの経験を通して人々の意識も向上し、いままで上層にあった責任の所在も、共通の人間の責任として個人の手元に落ちてきた。シェリーは人間の苦悩の多くは人間自身の弱さから生じているという観点に立ち、自分たちを上から抑えつけて自由を奪い、震え上がらせている権威や権力でさえ、それにおもねたり、傘に着たりする人間の存在があるから成り立っていると考えた。シェリーの神話ではジュピターは、人間性を蹂躪する非人間的権力を指すが、そればかりでなく一人ひとりの人間の心の中の非人間的要素にもジュピターを見い出している。そこでジュピターを打倒するために人間は自分の中の非人間的要素とまず対決しなければならない。シェリーの神話にはジュピターとの和解はありえなくなるのである。プロットは次の通りである。プロメテウスは秘密を明かさず、ジュピターはセティスと結婚する。二人の間に生れた息子は予言の通りジュピターを奈落の底に引きずり降ろし、プロメテウスは解放された。そして人々は自由と平等のうちに美しく生活するようになったので、彼は恋人のエイシアを伴ってとある洞窟にこもる。人間をその「無常」の宿命から守

るためにと。

人間が自己の非人間的要素を克服するのは容易なことではない。それは「死すべき生命」という根本的不条理に起因するからである。それをシェリーは人間の「無常」と呼ぶ。「無常」の鎖は決して立ち切れるものではないので、そこから解放されるには、意識の上でそれを超越することしかない。実際、シェリーの神話においてプロメテウスがした行動はただジュピターに秘密を明かさなかったというそれだけである。しかし彼は縛めの苦しみを積極的に耐え忍ぶことによって悟りの境地に達するという内面のドラマを繰広げる。ところで人類の救済、磔、脇腹の傷(はげ鷹による傷)、そして神でありながら人間の代表をするもので思い出されるのはキリストである。実際、キリスト教会の教父たちはプロメテウスの姿を通して異教世界にも救世主のイメージは啓示されていると考えたほどである。シェリーのプロメテウスにはキリストを暗示させるものがある。しかし彼はプロメテウスをキリストに近ずけるのではなく、キリストをプロメテウスに近ずけているのである。つまり、シェリーはキリストをキリスト教会から救い出し、キリストの神力を帯びたプロメテウスにしたと言った方がいい。キリストは愛を説いて人々を救いに導いたが、プロメテウスも「永遠の愛」によって人間の意識を向上させ、「無常」を超克して世界を解放に向けている。更にシェリーの神話では、非人間的権力(ジュピター)が陥落するのに、デモゴーゴンという名前の宇宙の「必然の法則」の登場が不可欠の要素となっている。デモゴーゴンとは、すべてのものに平等に働き、何人もその法則に逆って行動することの出来ない必然の神的な力である。この神的力への信仰はシェリーの多くの作品にみられるような非暴力革命の思想を形成している。デモゴーゴンの名が与えられたのは、この作品に於いて初めてであるが、この力の作用についても一番明確にされている。何人も逆えないこの力に敢えて逆おうとする者に待っているものはただ没落の運命だけである。それがこの神話に於けるジュピターの運命である。

作品は四幕十一場の長編の詩劇で、登場人物はジュピター、プロメテウスの他、プロメテウスの母である「大地」、プロメテウスの恋人エイシアそしてジュピターの息子を名乗る「必然の法則」であるデモゴーゴンである。

ロマン主義に於けるプロメテウスの王国

*第一幕 プロメテウスの変容

劇は、アイスキュロスの『縛められたプロメテウス』の後を受けて、プロメテウスがそのままコーカサスの山上に三千年の永きに亘って縛られているところから始まる。時は、夜、朝は

まもなく明けようとしていた。岩山に縛りつけられたプロメテウスは天地に身をさらして呻吟している。このプロメテウスの呻きの言葉から神話の全体的状況が知らされる。プロメテウスはジュピターの支配する世界を決して眠らずに凝視している。彼の「意識」だけがこの世界に対するジュピターの最終的な指揮権を取り押えて、人間の生存権を守っている。現在はジュピターが優位にあるが、プロメテウスはジュピターの弱みを握っている為、彼が自分に手を下せないことを知っている。しかし人間には人間の縛められるべき本質的弱さがあるためジュピターは安泰である。二人の神はにらみ合ったまま微動だに出来ない状態にいた。しかしいまプロメテウスは、ジュピターが彼に与えた逆境が、それを耐え抜くことによって、逆に彼にジュピターの世界を超えて出る契機を与えてくれているという皮肉な真理に気づき、やがて来る自分の勝利に確信をもった。

Monarch of Gods and Dæmons, and all Spirits
But One, who throng those bright and rolling Worlds
Which Thou and I alone of living things
Behold with sleepless eyes ! regard this Earth
Made multitudinous with thy slaves, whom thou
Requiest for knee-worship, prayer and praise,
And toil, and hecatombs of broken hearts,
With fear and self contempt and barren hope;
Whilst me, who am thy foe, eyeless in hate,
Hast thou made reign and triumph, to thy scorn,
O'er mine own misery and thy vain revenge.—
Three thousand years of sleep-unsheltered hours
And moments—aye divided by keen pangs
Till they seemed years, torture and solitude,
Scorn and despair, —these are mine empire:—
More glorious far than that which thou surveyest
From thine unenvied throne, O mighty God !
Almighty, had I deigned to share the shame
Of thine ill tyranny, and hung not here
Nailed to ...

Ah me, alas, pain, pain ever, forever !

(I. 1-23)

No change, no pause, no hope ! —Yet I endure.

(I. 24)

このきらめき巡る世界に集う神々やデーモン、そしてすべての精霊たちの王者よ
いやすべてではない、一人のものは除いてだ。

生きとし生けるものの中であなたと私だけが

眠りのないまなこでこの世界を見詰めている。

見よ！大地はあなたのおびたしい奴隷の群れで萎めいている。

それなのにあなたはぬかずく礼拝、祈り、礼賛、

労苦や打ち砕かれた心という捧げ物に対して

恐怖や自己卑下、不毛の希望で報いているのだ。

だが、あなたは憎しみで盲目となり、

敵である私をこの悲惨な境遇の主じとし、

あなたの復讐に打ち勝たせ、それを空しいものにしたのだ。

負け惜しみと思うなら軽蔑したまえ。

眠りに守られなかった三千年という時間の一瞬一瞬、そうだ、

激しいうずきで刻まれ、その一瞬一瞬が年月のように長く感じられ

苦しみと孤独、恥辱と絶望、それが私の王国だ。でもそれは

あなたの王座から眺められるかの王国より遙かに誉れ高いものだ。

あなたの王座など羨むべきものでもない。

ああ、強大なる神よ！ もし私が恥知らずにも

あなたの邪悪な暴虐に肩入れしていたら、

そしてこんなところに釘付になっていなかったなら

あなたは全能になっていただろうに。…

ああ苦痛だ、ずっと永遠に苦痛だ。…

変化もなく、休息もなく、望みもない！ でも私は耐える。

ジュピターは生きとし生けるものを憎悪し、そのうえに力を行使したがる人間の心のある一面
を代表するものでもあり、そのジュピターを倒すには、彼と同じ次元の世界にいたのでは勝ち

目のないことがわかった。彼はジュピター的世界から抜けるためには第一に自分の心から憎しみを取り払わなければならないと感じ、それには先ずいままでジュピターに投げ付けてきた自分の呪いの言葉を撤回しようとした。そこで彼は自分の呪いを聞いていたはずの天地に自分の言った言葉を教えて貰おうとするが、誰もジュピターの災いを恐れて答えてくれなかった。すると彼の母の「大地」は、地下の世界にはこの世のすべてのものの影が存在するということ、そしてそこからどの影でも呼び出してそれを聞くことが出来ることを教えてくれた。そこで彼はジュピターの影を呼び出し、呪いの言葉を聞き出し、それを心から悔やんだ。これによってプロメテウスは心の中のジュピターの憎悪の回避は出来たが、それだけでは十分ではない。憎しみを去った心に「愛」が満ち溢れてきてこそ本当の人間の救済が可能になる。彼はつぶやいた。

I wish no living thing to suffer pain.

(I. 305)

私は生とし生けるものがもう苦しみをなめることがないよう望みます。

第一幕のドラマは引き続いて進行するが、内容的にはプロメテウスのこの「愛の悟り」の過程を描写する結果となっている。

さて、そこへマーキュリーがやってきて、彼にジュピターの秘密を明かすよう説得した。プロメテウスが断固としてそれを断わるとマーキュリーは、彼の苦しみがこの先いつ果てることもなく続くと脅したり、人間などほっておいて神々の享樂を共にしないかと誘惑したりした。しかし彼が拒否したので、仕方なくマーキュリーは彼のもとにジュピターの獵犬フューリーたちを残した。彼らはジュピターの頭をかすめる有りとあらゆる悪念から生れたもので、見るも忌わしい姿で空を真っ暗に覆い、次ぎから次ぎへとプロメテウスをなぶりに来た。しかし彼は「苦痛は私の要素だ」(I. 447)と撥ねつけたので、フューリーは今度は彼の心に絶望感を送り込んだ。フューリーは、人間を苦しめているのは他でもないプロメテウスの与えた数々の「善」なのだと擦り寄ってささやいた。

Dost thou boast the clear knowledge thou waken'dst for man?

Then was kindled within him a thirst which outran

Those perishing waters; a thirst of fierce fever,

Hope, love, doubt, desire—which consume him forever.

(I. 542-545)

ロマン主義に於けるプロメテウスの王国

お前は人間を目覚めさせたあの煌々たる知識を誇っているのだろう。
それから人間の心には河川をも干あがらせる乾きを上回る渇きが
燃え上がったのだ。希望，愛，疑心，欲望の激しい熱の渇きが。
それが人間を消耗しつづけることになったのだ。

そしてその証拠に、フューリーたちは、同じように「善」が起因しておこった数々の流血の歴史を彼に披露した。

One came forth, of gentle worth,
Smiling on the sanguine earth;
His words outlived him, like swift poison
 Withering up truth, peace and pity. (I. 546-549)

気高い，真に価値あるものが
この血に染まった世界に微笑みながら下りて来られた。
そのみ言葉は彼が去ったまでに残り，素早く回る毒のように
真理や平和やあわれみを枯らした。

これは，キリスト教の忌わしい歴史のことである。人々の救霊のために神から送られたキリストの言葉は，教会の手に落ちるとやがて魂を救済する唯一のものとして力を振りかざし始め，人々を罪の意識に縛りつけたり，血で血を洗うような宗教戦争を引き起こしたり，また魔女狩りに代表されるような凄じい宗教的迫害に及んだりしたという事実に触れるものである。

The nations thronged around, and cried aloud
As with one voice, "Truth, liberty and love !"
Suddenly fierce confusion fell from Heaven
Among them—there was strife, deceit and fear;
Tyrants rushed in, and did divide the spoil. (I. 650-654)

国々は群れ集い，声を一つにして絶叫した，
「真理だ，自由だ，愛だ！」と。すると突然

天から凄じい混乱が彼らの間に転がり落ち、
闘争、干計、恐怖が起った。
暴君たちがいきなりなだれ込み、戦利品を分け合った。

これは主にフランス革命のことを言っている。自由を標榜し、既成の権力の悪に挑戦したはずのフランス革命もまもなくジャコバン党の恐怖政治のような新たな悪を生みだし、またはナポレオンのような新たな独裁者を奉る結果になったことを指している。これらのヴィジョンを見せつけられて、心中もだえ苦しむプロメテウスに、フューリーは最後のとどめを刺そうと、「どんな偉い人も偽善の心や習慣から自からの心を偶像崇拜の神殿にしてしまう。」(I.621-622)といい、そして「最高なものもこうして悪にまみれてしまうのだ。」(I. 628)と言って、人間の無限の邪悪さを示した。しかし彼は誘惑を忍び、「お前のその言葉を聞いて苦しまないものこそ哀れむ」(I. 633)といって信念を貫いたので、フューリーは掻き消えた。プロメテウスが誘惑を退けるとたちまちフューリーは霧散してしまったので、それらは彼の心にらちらついた懷疑の陰りとも考えられる。これらはロマン主義の時代に意識され始めた懷疑の代表的なものを示している。キリスト教に対するもの、暴力革命に対するものそして最後に人間存在そのものに対する懷疑である。それらは近代科学の急速の進歩や機械の発達、またそれらの影響で引き起こされた階級の崩壊、自由思想の発展など、社会の新旧交代の地滑りの状態の中で、起る可くして起ったものである。悪い結果だけを見せつけてプロメテウスの人類愛を妨げようとした企ては失敗したが、これらが人間社会の一つの現実であることに変わりはない。

「大地」はフューリーにさいなまれたプロメテウスを痛ましく思い、彼を慰めるために人間の思考に宿る美しい精たちを招き寄せた。彼らは人間の勇気や美徳や聖者の夢や詩人の歌の中からやって来て、きらきら光る春の雲のように青空に群がり、その翼をオレンジ色、青、そして金色へと刻々と変化させながら清らかな音楽を奏でた。それはこの上なく甘く美しいものであったが、その美しさにはそれと同じくらいの深い悲しさが秘められていた。そこには愛が入り交じった絶望の響きがあった。それは傷ついたプロメテウスの心から流れてた悲哀のメロディーでもあった。精たちはプロメテウスを「悲しみの王」と呼び、彼を元気づけるために彼が「破滅」を取り押えて、予言どおり「愛」をこの世に取り戻すと次々と歌を歌って告げた。

Hast thou beheld the form of Love?

(I. 763)

あなたは愛の姿を見ましたか。

I sped, like some swift cloud that wings the wide air's wildernesses,
That planet-crested Shape swept by on lightning-braided pinions,
Scattering the liquid joy of life from his ambrosial tresses:
His footsteps paved the world with light—but as I past 'twas fading
And hollow Ruin yawned behind... —till thou, O King of sadness,
Turned by thy smile the worst I saw to recollected gladness. (I. 764–771)

私は見ました、かの星を冠に頂いた「姿」が、天の広野をはばたく
素速い雲のように、電光で編んだ翼に乗ってかすめていくのを
その香ぐわしい髪の毛から命の清らかな歓びを撒き散らしながら。
その足跡は世界に光りを敷きつめていったけれども、私が過ぎ去ると
それは色あせて、後ろには虚ろな「破滅」が大きな口を開けていました。
…やがてあなたが、ああ、悲しみの王よ！ あなたの微笑みで
私の見たこの上なく悲しいものを安らかな歓びに変えてくれるまで

Though Ruin now Love's shadow be,
Following him destroyingly
On Death's white and winged steed,
Which the fleetest cannot flee—
Trampling down both flower and weed,
Man and beast and foul and fair,
Like a tempest through the air;
Thou shalt quell this Horseman grim,
Woundedless though in heart and limb.— (I. 780–788)

今は「破滅」は愛の影となって、
羽をつけた死の青ざめた馬に乗り
疾風といえども逃げられない速さで
「愛」の後を破壊していき、
花も草も、人も獣も、忌わしいものも美しいものも

吹きすさぶ嵐のように踏みにじっていくのですが、
あなたは、心も身体も傷を負ったことのない
この「騎手」を取り押えてくれるのです。

それらの歌を聞いてプロメテウスは、愛がなければすべての望みは空しいものだと悟った。彼の心に起った変化、「愛の悟り」は、彼の姿の変貌で示される。彼の体から縛めによる古い傷がそげ落ち、光り輝く愛の姿となった。それはキリストの「変容」を彷彿させるものである。彼の愛はその強い光りに乗って遠く追放されている恋人のエイシアのところに届いた。彼が縛めを受け、憎しみに身を焦がしたのと同時に追放されたエイシアは、彼の見失った「愛」をも象徴するものである。シェリーでは人類愛もアガペではなく、恋人に対するような相互に引かれ合う愛、エロースで示されるのは特徴的である。

*第二幕 エイシアの変容

第二幕は、エイシアのいる遠いインディアン・コーカサスの谷間に朝が白み始まるところから始まる。昨日まで冬枯れた荒れ野に芽吹きが始まったので、彼女は待っていた「時」の訪れが間近だと知って心を躍らせた。プロメテウスの愛の目覚めはまた自然界の目覚めを伴い、夜が朝に、冬が春に目覚めた。エイシアは変容したプロメテウスのヴィジョンを見て狂喜した。また彼女はそのなかにキラキラと素速く動く影を見出すが、それは突然エイシアに「ついておいで、ついておいで」といって彼女を差し招いた。すると山のこだまが、森の木霊が、谷の精が同じ様に「ついておいで、ついておいで」(II.i 132)と彼女を招き、遂に彼女は万物を司る「必然の法則」(II.ii 41-63)、デモゴーゴンの洞窟へと導びかれた。デモゴーゴンの洞窟は「プリズムのないところ」(II.iii 75)であるから、我々の現象界に対する実在界である。デモゴーゴンは凄じい漆黒の光線を放つ「生ける闇」として描出されている。そこでエイシアはデモゴーゴンに次々と質問した。エイシアの「万物を作ったのは誰ですか」(II.iv 8)の質問に、デモゴーゴンは「神だ」(II.iv 9)と答え、また「人間の考える力や情熱、また意志や想像力は」(II.iv 10)の質問に、「全能の神」(II.iv 11)と答えた。そこで、彼女はこの世の悪や不幸を挙げて、そうしたものは誰が作ったのかと聞いた。するとデモゴーゴンは、「彼は支配している。」(II.iv 28)とのみ答えた。エイシアは悪をもたらす神の名を聞き出そうとしたが、デモゴーゴンは「彼は支配している。」と繰り返すばかりであった。暫く自問自答しているうち彼女はジュピターは神ではないと直感した。それは彼がプロメテウスをひどく恐れているからであった。それはデモゴーゴンの次ぎの言葉で決定的となった。

All spirits are enslaved who serve things evil:

Thou knowest if Jupiter be such or no.

(II.iv 110–111)

悪しきことに仕えるすべてのものは奴隷となっている。

ジュピターがそのようなものかどうかあなたは知っている筈です。

悪に仕える故にジュピターも奴隷であるとすれば、ジュピターの主人は誰なのか、エイシアの疑問は尽きない。では「誰を神と呼ぶのですか。」(II.iv 112)の質問に、デモゴーゴンは「私はあなた方人間が話すように話したに過ぎない。というのはジュピターは生けるものの至高者である。」(II.iv 113)と答えた。エイシアの質問は、人間の一般的な思い—神は支配の最高位にいるものという考え—を代弁している。そういう考えに則れば、いまこの世を支配しているのはジュピターだから、彼を神と呼べばいいではないか、というのがデモゴーゴンの意味するところであろう。次にエイシアが発した「その奴隷の主人は誰ですか。」(II.iv 114)の質問はそれ自身一つの解答になっている。奴隷には主人が、主人には奴隷がいる。主人と奴隷は互いに相手の存在がなければ成り立たないものであり、主奴の関係における主人は奴隷が低くひれ伏せばひれ伏すほど高みに登るという相対的、依存的なものである。しかし神は全能であるが故に一人で神である。支配したり、されたりという状態それ自身、神の完全性を遠く離れた人間界の不完全な存在様式を露呈していることになる。「彼は支配している。」というデモゴーゴンの言葉の中の「彼」はジュピターを指し、また支配という人間関係の状況そのものが悪だといっていることになる。ジュピターは半分人間が作りあげた亡霊、また偶像であるから、悪の状態も人間自身が作ったことになる。これがデモゴーゴンとの霊的交信のなかでエイシアが感じ取った内容で、これはエイシアの目覚めを通して人間が自分たちを呪縛していたものの正体に気付いたことを意味する。ジュピターの本性は暴露された、次にデモゴーゴンは大切な真理について語った。

—If the Abyssm

Could vomit forth its secrets:—but a voice

Is wanting, the deep truth is imageless;

For what would it avail to bid thee gaze

On the revolving world? what to bid speak

Fate, Time, Occasion, Chance and Change? To these
All things are subjected but eternal Love.

(II.iv 114-121)

もし深淵が

その神秘を噴出することが出来るとしても、一でも声が
ないので、深い真理は形がないのです。

あなたにこの回転する世界を凝視するように命じたとして
如何になるものでもない。また運命や時間や好機、偶然や変化に
語れと命じても如何になるものでもない。「永遠の愛」以外の
すべてのものはこれらに従属しているのです。

この「深淵」とは深い真理を秘めているので神の存在を暗示する何かである。シェリーの神は不可知であり、神の存在を唯一感知させるものとして豊かに繰り返される自然界の営みを考えている。シェリーはそれら可視的現象を司っているものを「必然の法則」と呼び、デモゴゴンの名を与えた。その法則の作用から生じる日常の「運命や偶然、時間や変化」は人間に強い威力を発揮するが、「永遠の愛」だけがそれらの力の支配から免れているのだという。その超越的な性格から「永遠の愛」もまた神の存在の流出と考えられる。シェリーの場合「永遠の愛」も人間の間にきよう相互的愛エロースである。そこでエイシアが神々しく変容したプロメテウスから放射された「愛」に促されてデモゴゴンを訪ねた時、デモゴゴンの「必然の法則」はジュピターの陥落に向かってその「運命の時間」の発動を準備し始めたことになる。

次にエイシアはプロメテウスの解放の時を尋ねた。するとデモゴゴンが「見よ！」(II.iv 128)といったかと思うと、突然洞窟の天上が裂け、「運命の時」の車が虹の翼をつけた駿馬に引かれて現われた。そのうちの一台はデモゴゴンが、もう一台にはエイシアが招かれて乗り、彼らは洞窟を去り、それぞれの使命に向かって飛び立った。エイシアは空高く舞い上がり、猛スピードで世界を回り、やがて見張るかす雲海の中にそびえ立つ山頂にたどり着くと、そこで彼女もプロメテウスに次いで女神に「変容」を遂げた。彼女は海から生れたヴィーナスを暗示する縞状に波立つ貝の中に立って目のくらむように強い光りに包まれた。彼女の光り輝く姿から溢れだした愛は光りに乗って天地の隅々まで届けられ、すべてを明るく照らした。するとプロメテウスの声が辺りに響きわたって「生命の生命よ！」(II.v 48)とエイシアを呼び、彼女を讃える歌が聴こえた。それに答えて、エイシアは「私の魂は魅せられた小舟」(II.v 72)で始まる抒情詩をプロメテウスに捧げた。この二つの抒情詩は、二人の恋愛感情の高まりが自他の区

別のない恍惚感に達し、それが次第に人類愛へと溶け込んでいく最高にシェリーの的なものである。通常、恋愛感情は突然理由もなく人間を捕えることから、キューピットの矢に射られたという説明がぴったりでキューピットすなわちエロースで示される。それに対して人類愛はその普遍的性質から、神の無償の愛、アガペで示される。教会はキリストの「友の為に命を捧げることより大いなる愛はなし」⁹⁾という言葉を受けて、没我的なアガペだけが愛の名に相応しく、エロースは個人的、性愛的として蔑視してきた。しかしシェリーはその考えに反発し、個人的愛情の延長線上に人類愛を置いた。また相互に引かれ合う愛エロースが男女の間に通うとは、男女が全く対等の立場に立つことを意味し、女性解放につながる人間の新しい意識の目覚めでもある。エイシアの歌は次のように高まっていく。

And we sail on, away, afar,
Without a course—without a star—
But by the instinct of sweet Music driven
Till, through Elysian garden islets
By thee, most beautiful of pilots,
Where never mortal pinnacle glided,
The boat of my desire is guided—
Realms where the air we breathe is Love
Which in the winds and on the waves doth move,
Harmonising this Earth with what we feel above. (II.v 88-97)

そうして私の舟は漕ぎ出す、遠くかなたへと、
進路もなく、星もなく—
ただ、心に湧き上がる甘美な調べに駆り立てられて
遂にエリジアムの島々を縫い、
優れて美しい水先案内人、あなたの手によって、
人の魂の小舟が通ったことのないところへ
私のあこがれの舟は導びかれる—
そこは吸い込む大気が愛である領域、
愛が風のなかに、波の上にたゆたい
この大地を天上で感じられるものと調和させる処。

シェリーは必ずしも恋愛における性愛を重く見たわけではない。それは主に他者との一体感を示すのに象徴的に使われているのである。恋愛以外にも兄弟、姉妹の間の愛をも使っている。シェリーはインセストを好むと誤解され、非難される場合もあるが、意味するところは愛の本質、人間間の最高のハーモニーを明かすことである。この劇でも、第四幕では兄妹の愛情がその象徴として使われている。

一方、天上界ではもう一つの出来事が行なわれていた。

*第三幕 ジュピターの陥落

第三幕は天上で、ジュピターがセティスとの間に新しく生まれる偉大な息子、デモゴーゴン
を披露するために神々の饗宴を開いているところから始まる。ジュピターとセティスとの間には互いに引かれ合うエロースが存在しない。ジュピターの欲望は一方的で、嫌がるセティスを腕づくで自分のものにしたにすぎず、これはジュピターの他者への関係性を如実に象徴している。永遠の輝きを思わせる美しいセティスを手に入れて、ジュピターのおごりは極みに達し、いまや宇宙の「必然の法則」さえも自分を中心にして回ると信じ切った。まもなく到着するデモゴーゴンは息子として自分に仕え、自分の王座も永遠の宇宙とともに永遠となるはずであった。ところが雷鳴とともに「時」の車で到着したデモゴーゴンはジュピターの前に進み出て「汝の子だ」(III,i 54)と名乗ると、あっという間に彼を掴んで闇の中に躍り込んだ。ジュピターは猶予もなしに底なしの空隙に飲み込まれてしまった。

「必然の法則」は約束の息子として、予言の通りジュピターを倒した。おごりの極みに達したジュピターは自分が神であると錯覚し、権力支配における主奴の相互関係のバランスを破って支えるものもない宙に浮いた状態になっていたのである。次ぎに来るものは陥落だけしかなかった。陥落の必然性はジュピター自身が原因して生れたという意味で、デモゴーゴンは「汝の子だ」と名乗ったと考えられる。プロメテウスの「愛の悟り」、エイシアの「目覚め」はジュピターの陥落への必然力の発動を促したが、それはジュピター自身が招いた陥落の必然性と重ね合わされているところが興味深い。人間が自らの精神の中でジュピターを作りの出さなことが第一に大切なことであるが、すでに出来上ってしまっているジュピターを消滅させるには、プロメテウスとエイシアの誠実な努力の上に、ジュピター自身の凋落の「時」を待たなければならない。この姿勢の中に、シェリーの非暴力主義の思想が伺えるのである。

プロメテウスとエイシアは再会し、彼は愛を取り戻した。プロメテウスに接吻を受けた「大地」は、その凍り付いた胸に生命と歓びが走り、彼女の抱いているすべての生命がその活動を

始めた。プロメテウスが縛めを受けていた間、「大地」が憎しみのあまりいかに荒廃していたかが語られているので、「大地」がプロメテウスの心の表われであったことが明示された。「大地」は人間と自然の生命を育むところであることから、プロメテウス即ち人間の心持が社会と自然にそのまま映し出されるという考えになり、これもまたシェリー特有のものである。プロメテウスはエイシアをつれてきた「運命の時」に、その速い駿馬で世界を周り、永く望まれた解放の「時」として、人類に福音を告げるように命じた。それが済むと二人はこれからの住みかとなる自然の秘境にある汚れない洞窟に向かった。「大地」はそこを「遙かな時間のゴール」(III,iv 174)と呼び、二人の道案内にと「地の精」を呼び出した。たいまつを持って現われた「地の精」は背中に羽根をつけた子供の姿であるところから、キュービット(エロース)であり、彼の持つ「たいまつ」はプロメテウスが人間にもたらした火—愛の悟り—を象徴すると考えられる。二人はそこで自分たちは変化することなく、潮の満干のままに移ろう世界の「時と変化」について語り合うという。どうしたら人類を「無常」から守ることが出来るのかと。そして一方が悲しみに沈むときもう一方が微笑みで励まし合おうと決めたのである。

「時」は世界を周って戻ってきた。そして福音を聞いて、人類の上に起った変化について次のように報告した。

「すべての王座に王はなく、人間は互いに肩を並べて精たちのように歩いていました。おもねたり、蔑んだりするものもありませんでした。人類の額に印されていた憎しみも、悔りも、恐れも、利己心も、自己卑下も消えてしまっていました。……女たちもまた、広い大地にみずみずしい光りと露を振りまく自由な天のように、素直で美しく、親切になり、習慣という悪の汚染から免れ、清められ、優しく輝く姿になって私の前を通りすぎて行きました。……以前は恐ろしくて感じようとしなかった感情を眼に表わし、また以前は敢てなろうとしなかった姿に変わり、地を天国のようにしました。……人々の住むところで権力が最近まで捕虜をとらえるために使っていた道具や象徴などは、打ち壊されてこそいなくとも、今では顧みられなくなりました。しかも神と人との忌避されるこれらの忌わしいものたちは様々な名前を持ち、奇妙だったり、野蛮でぞっとするようだったり、暗く呪われているような姿だったりしても、それら世界の暴君ジュピターであったのです。……その厭しい仮面は落ちてしまったのです。人類はもはや笏もなく、自由で、束縛もなく「人間」であり、平等で、階級もなく、種族や国家の別もなく、畏敬も礼拝も、位もなく、自己を支配する王者となり、正しく、優しく、賢く、「人間」なのです、でも、煩悩が無いというわけではありません—そうです。かつての罪や苦しみからは自由になりました、それは人間の意志が作って味わったのですから。けれども、運命や死や、無常からは免れてはいないのです。……」(IV. 131-204)

人間はジュピターの呪縛を解かれ、愛に包まれて「人間」になった。また、女性が「地を天国のようにした」という表現の中にエイシアの歌った抒情詩の実現が示され、世の中を変えていく為に女性の力は欠かせないものとするシェリーの考えが示されている。「時間」のこの長い科白を以て第三幕は閉じている。

＊第四幕 解放された世界のヴィジョン

シェリーは潔く理想郷を描いてみせる稀な詩人の一人である。第四幕は、自ら解放し、解放された世界の神秘的な映像である。自由になった人間の精神の精たち、自然界の精たち、新しい時間の精たちは歓びのコーラスを響かせる。しかしこれはシェリーにとって空想の映像ではない。この世界は移ろい易い現象界であるといっても単なる霧の状態にあるのではなく、それは永遠の實在が投影されたものであり、心の目を凝らして見れば、その向うに一つの原理をみることが出来る。世界は一つの意味を成しているのである。ここで描かれている世界は心の目を通して見られた本来の世界の実相である。世界は神の秩序である法則によって運動をし、神の愛が世界の意味である。その愛は人間の間の愛として現われると同時に、神の法則を受ける自然界のすべての営みの中にも、また人間と自然界との調和の中にも現われる。かつて地獄の悪魔が蛇の姿を取って人間を誘惑したと教える宗教が横行すれば、すべての蛇は醜くなったが、人間が囚われた考えを捨てた今では、自然はありのままの美を放ち、人間と心を通わせ合う¹⁰⁾。シェリーがキリスト教会から救い出したものは、「愛」と「自然」ばかりでない。「時間」もまた救い出したのである。来世(天国)のみに希望を置くことを教える教会にとって、この世の時間は、世の終りの終末にむかって直線的に走っていくものであった。しかしシェリーは「時間」を生成と消滅の無限の円を描くものとしてとらえ、「時間」に意味を持たせた。そこで死も新しい生命が生れるまえの一時休止、種の冬の眠りの様なものになったのである。

これは、解放されて歓び踊る「時間の精」たちの歌である。

Once the hungry Hours were hounds

Which chased the Day, like a bleeding deer

And it limped and stumbled with many wounds

Through the nightly dells of the desert year.

(IV. 73-76)

かつて飢えた「時」は獵犬となって

血を流して逃げる鹿のような「日」を追跡した。

そして多くの傷を追った「日」は足を引きずり、つまずきながら
詫しい月日の夜のような谷間をぬっていった。

But now—oh weave the mystic measure

Of music and dance and shapes of light,

Let the Hours, and the Spirits of might and pleasure

Like the clouds and sunbeams unite.

(IV. 77-80)

でも今は、おお、織り成しなさい、
音楽と踊りの不思議なリズムと様々な光りの姿とを、
時間たちと、生命力と歓びの精たちを一つにさせなさい、
雲と太陽の光線が溶け合うように。

次ぎに世界は地球と月の満干の関係を通して、神の引力あるいは互いに引かれ合う孤独の力の働きのなかで調和した華麗な姿で呈示されている。地球に乗っているのはエロースの象徴である「地の精」である。彼は何千という小さな球がそれぞれの軸を中心に自転をしてお互いに関わり合っながらそれぞれ自身一つの大きな球をなす、明らかに地球を思わせるエメラルド色に輝く水晶玉の中に座って、きらびやかな音楽を振り撒きながら悠々と回転しつづける。

Ha ! ha ! the animation of delight

Which wraps me, like an atmosphere of light,

And bears me as a cloud is borne by its own wind !

(IV. 322-324)

は、は、嬉しさの躍動よ！
光りの大気のように深々と私を包み
雲が自らの風で流れていくように、私を運ぶものよ！

そのつれあいは四月の雪片のように真っ白に透き通った肌の、羽根のつけた幼児で、三日月に丸い影の天がいを広げた月に乗って、兄と慕う地球の後を何処へでも旋回してついていく。つごもりから生れ出たばかりの三日月は愛するものが見つめ合い互いに似たものに成長するように、地球の姿にまで真丸く満ちる。月食は地球の影にすっぽりと抱かれた月の歓びである。

As in the soft and sweet eclipse
When soul meets soul on lovers' lips,
High hearts are calm and brightest eyes are dull;
So when thy shadow falls on me
Then am I mute and still,— by thee
Covered; of thy love, Orb most beautiful,
Full, oh, too full ! (IV. 451–456)

穏やかな、甘美な闇の中で
魂と魂が愛するものの唇の上で合わせられるとき
高ぶった心は鎮まり、輝いた瞳はうっとりと閉じるように
そのようにあなたの影が私に落ちるとき、
私は黙して静まる—あなたに包まれて
最も美しい球であるあなたの愛で満たされて
ああ 満ち溢れて！

この月食の比喩には世界の愛の相貌が表現されているのであるが、この最も暗い空の闇に愛の至福が表現されているということは、この世界が逆説的な存在様式の中に浮かんでいることを暗示するものである。しかしこのことは、ここに描かれた世界の鮮明な映像に陰りを落とすものではない。人間は月と地球の比喩で表わされているとおり、太陽のように自ら光りを放つ存在ではない。「安楽に暮す」神々に対比して人間は「無常」の宿命に縛られた惨めな生き物であるには違いない。プロメテウスの立場は人間のこの不条理で否定的存在様式を逆手に取り、それだからこそ人間はかばい合い、真剣に愛し、人生を悟りもする。そして様々な改善や発明をし、芸術的活動をして創造的に生きられるのだとする。闇は愛の契機であり、創造の宝庫であり、人間の存在が光りを放つ条件となる、これを以てプロメテウスは人間の生存に意味を与え、その存在を肯定しうる立場を取るのである。このとき人間は、神々に匹敵するものとなり、救済されるのである。

このように世界は解放された反面、プロメテウス自身は安楽に生を享受するのではなく、アイスキュロスのプロメテウスが鉄の指輪をはめたように、人間の「無常」の猛威を抑制するために「愛」に変容したエイシアを伴って洞窟にこもった。「無常」の闇は諸刃の剣であるから

である。闇は人間を神々しい存在にしうると同時に、深い奈落の淵にも誘うデモニッシュなものである。人間の心はいつも目覚めて刷新に努めなければならない。変容を遂げたプロメテウスは霊的な存在として人間の心に目覚めと創造性を促す何かとなった。彼の住む洞窟とは「遙かな時間のゴール」であるから時間を超えた人間の精神の最も崇高な領域で、創造的自我の領分と思われる。「苦痛は私の要素だ」と言ったように彼の恒常的な創造の痛みがあってこそこの世界は解放されているのである。

ロマン主義のプロメテウスの王国は人間の苦難と逆境を治める心の修練と英知の王国で、その王座には人間の悲哀を知る「悲しみの王」が「愛」を傍らに置いて座っている。第四幕の最後にはデモゴゴンが登場して、この世に暴政が蘇えないという保証はないが、「柔和、高德、英知、堪忍」はいつもその破壊力を封じ込める証印となるものであり、困難を乗り越えてこの世界を解放に導いたプロメテウスを誉め讃え、祝福した。

結 び

シェリーは社会改革に思いを馳せて止まない詩人である。彼の初期の思想はゴドウィンの急進的な自由思想に負うところが多かった、しかし社会はそれ自身人間の集まりである。社会を構成する人間の心根が社会の姿に反映されないはずがない。そこでシェリーはまず人間の自己改革を考えなければ、社会の改革はならないという認識に至った。初期の作品の中でもその点を見逃してきた訳ではないが、『縛めを解かれたプロメテウス』においては人間の自己改革を中心に据えて、彼の理想境の思想を展開している。彼の理想の社会は「平等で、階級もなく、人種や国家の別もなく、恐れや礼拝もない」ところであるが、これは当時では余りに空想的と一蹴されたものと思われる。それから約200年たった今日、ヨーロッパはEC 統合のヴィジョンや非暴力による連帯の勝利などシェリーが聞いたら泣いて歓びそうな情勢が出現しはじめている。一方で相変わらず様々なジュピターも出没している。全体としてジュピターたちは小粒になってきているような気がするが、種類は多様化しているような気がする。

シェリーのもう一つの特徴は人間の心の模様が自然界に直接現われることである。これも夢想的と思われるかもしれないが、昨今の環境汚染、環境破壊の現実を考えると先見の明だったような気がする。アマゾンやその他世界各地の大地の生々しい傷跡は人間のエゴと欲をそのまま記しているのではなかろうか。母なる大地を荒らすという自己矛盾を人間は相変わらずくり返し、傷を癒そうとする一方で傷を広げているように見える。プロメテウスとエイシアのように、生命を愛する善なる意志はいつも目覚めて世界を見守っていなければならないのが現実である

う。古代のプロメテウス神話に人間存在の根元的不条理とその救済のテーマを見て取ったアイスキュロスのヴィジョンはロマン主義の中で新たな様相を以てくり返され、人間存在の普遍的テーマの象徴として今日の問題にも繋っているといえるのである。

註

1. Donald H.Reiman, ed. *Shelley's Poetry and Prose* (A Norton Critical Editon 1977) 作品の引用はこの版による。
2. J.P. Vernant et Atsuhiko Yoshida, *Œdipe et Prométhée* (Misuzu Shobo Publishing Co. Tokyo 1978) p.9-10
3. Hugh Lloyd-Jones, *The Justice of Zeus* (The Regents of the University of California 1977)
4. アイスキュロス, 「縛められたプロメテウス」呉 茂一訳(岩波文庫 1988)
5. 高津春繁, 「ギリシャ文学史」(岩波 1977)p.112
6. Karl Kerényi: *Prometheus*(ローヴオルツ・ドイツ 百科叢書 vol,95 1959)参照.
7. H.W.Parket & D.E. Wormell, *The Delphic Oracle*, II 61-2
8. テオグニス 425-428, ピンダロス Fr.157, ソボクレス『コロノスのオエディプス』p.1211
9. 『ヨハネ福音書』15・13
10. P.B.Shelley, *Prometheus Unbound*, IV. 70
11. William Godwin (1756-1836), *An Enquiry concerning the Principles of Political Justice* (1793)

参考書目

Earl R. Wasserman, *Prometheus Unbound: The Premises and the Mythic Mode*
Miriam Allott ed, *Essays on Shelley* (Liverpool Univ. Press 1982)
Northrop Frye, *A Study of English Romanticism* (The University of Chicago Press 1968)
Hugh Lloyd-Jones, *The Justice of Zeus* (The Regents of the University of California 1977)
Erich Fromm, *The Heart of Man -Its Genius for Good and Evil* (Haeper & Roe, Piublishers, New York 1964)
檜山欽四郎 「悪」(叢書 身体の思想 創文社 1982)